

チューリヒ啓蒙主義の系譜とJ.G.ズルツァー(中篇)

—ベルリンにおける教師活動とチューリヒ学徒の教養旅行—

上 畑 良 信

目次

- I. はじめに
- II. 新たな出立とマクデブルク時代
 1. 学窓の地、啓蒙都市チューリヒ
 2. マクデブルクへの転出と商家バツハマンの家族
- III. 新たな出会いと交友圏の拡大
 1. クロプシュトックと「水曜会」の主要メンバー
 2. 当主バツハマンの姪カタリーナ
- IV. 啓蒙神学者シュバルディンクへの書信
(以上「前篇」、第40巻第4号)
- V. ギムナジウム教師への就任と啓蒙教育家の格闘
 1. スイス人啓蒙教育家の誕生
 2. ギムナジウム教師の苦闘と挫折
- VI. チューリヒへの帰省と若者のドイツ教養旅行
 1. 二度目の帰省とチューリヒ学徒との親交
 2. 若きチューリヒ学徒の教養旅行
- VII. バールトとベルリンの啓蒙の先達
 1. シュバルディンクと彼の若者批評
 2. ベルリン啓蒙グループの要人—ズルツァーとシュバルディンク—
(以上「中篇」、本号)

V. ギムナジウム教師への就任と啓蒙教育家の格闘

前篇に引き続き、この中篇と後続する後篇では、一八世紀の啓蒙都市チューリヒが生んだ啓蒙教育家ヨハン・ゲオルク・ズルツァー (Sulzer, J.G.) に焦点をあて、この時代に特徴的な彼らの交友圏と、それがもたらした人間的結びつきと思想形成を、のちのペスタロッチー教育思想が成立する前史ないし時間的背景とみる問題視角から考察を試みる¹⁾。

前篇ではズルツァーの生涯の人間形成の軌跡をあとづける形で、学生時代の交わりを起点にし、マクデブルクのバッハマン家とその友人、およびその地マクデブルクの「水曜会」につながる文人・知識人たちとの出会いを中心に考察した。この中篇では、二度目の帰省旅行が実現した彼の壮年期に焦点を当て、離郷してなお変わりなく続く啓蒙の祖都市チューリヒとの強い結びつきを、彼のベルリンでの交友圏の深化や、啓蒙の使徒に固有の精神的格闘の歩みを辿りつつ考察してみたい。

1. スイス人啓蒙教育家の誕生

王位を継いだばかりのフリードリヒ2世は、オーストリアの王位継承問題を契機にシレジアの領有を主張し、それがオーストリアに拒否されると直ちに同地に出兵し、ベルリン条約で領有権を認めさせた。1742年のこの領土拡張の事件後、新国王はベルリンをプロイセンの宮城都市にすべくその整備に着手した。

啓蒙専制君主ののちに呼ばれた若き王は、王座に就いてから国力の充実を図りながら、王子時代からのフランス気触れと啓蒙思想への傾倒を国の政策に具現化し、宮城都市を拠点に文化と学問を奨励する政策を打ち出した。後者の措置の一つに異国の学者たちの招聘計画が含まれていたことはよく知られている。そもそもは生計の糧を求める必要から祖国を離れたズルツァーであったが、マクデブルクを経由して最終的に彼をこの地ベルリンへと招き寄せた時代背景とはこのようなものであった。

若きプロイセン王がベルリン王立科学アカデミーの振興のために呼び寄せた学識者たちは、主にフランス人とスイス人であった。この啓蒙君主は1742年から1750年の間に、ダルジャンスを皮切りに、モーペルテュイ (Maupertius, P.L.M de)、ラ・メトリ、さらにはヴォルテールを招聘することによって、このアカデミーに権威をつけようとした。また当時において、数学や物理学の領域で国際的な学者であったスイスのオイラー (Euler, Leonhard) もそのなかの重要な一員であった。ズルツァーがこのとき、その末端に列する形であるにせよ、こうしたスイス人教師の陣容に加わられたのは、パーゼル出身の同国人オイラーの引き合いによるものと推定することが可能であろう。だが、ズルツァーがベルリンで幸運にも常勤の公職に就くことができたのは、次に述べるように、より正確にはより身近な人物の仲介のおかげであったと言うべきである。

クリンケによれば、ベルリンの宮廷牧師ザック (Sack, August Friedrich Wilhelm) を介してズルツァーは、母国出身の数学者オイラーをベルリンに訪ねたらしく、これまでの学究活動の成果を示し、職を得るための援助を彼に請うたようだ²⁾。結果的にこの兩人、ザックとオイラーの斡旋によって、のちに科学アカデミーの会長になったモーペルテュイと面識を得る機会が与えられたものと推測される。こうして、ヨアヒムシュタル・ギムナジウム (Joachimsthalsches Gymnasium) の数学教師としての、自由職ポストでの推薦が首尾よく受け入れられ、1747年の晩夏にベルリンへと引っ越すことができたのである。このときズルツァーの就いた最初の職は、ベルン出身の数学教師ベグユリン (Beguelin) の後任というものであった。ズルツァーがこの職に就くために彼の業績として注目されたのは、1745年の刊行書『子どもの養育と教授に関する若干の理性的考察』だけではなかった。科学アカデミーの常任の書記であったフォルメイ (Formey, J.H.S.) は、ズルツァーの自然学的論文『自然に関する道徳的考察』 (Sulzer, *Versuch einiger moralischer Betrachtungen über die Werke der Natur*, Berlin 1745.) を仏語に翻訳しようと申し出た。それは、ドイツ語のできな

かったモーベルテュイらのフランス人学者たちを意識した側面支援という効果をもたらした。こうしたことで彼の評判がさらに高まり、1750年秋にはベルリン科学アカデミーへの正会員としての入会にこぎつけるにいたった。このときの正会員としての認定は、その哲学的業績が評価され、哲学部門の会員として受け入れられた³⁾。このことでお墨付きをえたズルツァーは、ライプニッツおよびヴォルフの論著を支持する立場から、自らの講義のなかで明白に啓蒙主義の哲学的理念を講述することができるようになったのである。

2. ギムナジウム教師の苦闘と挫折

さて、当時ベルリンに創設されていたエリート養成の基幹学校としてのギムナジウムに目を向けてみよう。一般に、ドイツで初等学校に接続する中等学校の形成は18世紀末から始まり、この時期に存在していたギムナジウムは大学の予備教育機関としての特殊な性格のものであった。もちろん、官吏や聖職者を中心としたエリートの養成を主要な任務としていた。

その当時のベルリンには、五つのギムナジウムが存在した。三つの都市ギムナジウム、すなわちベルリンとケルンとフリードリヒ・ヴェルダールの各ギムナジウムと、さらにそれに加えて二つの王立ギムナジウムであった。ブランデンブルク選帝侯のフリードリヒ・ヨアヒムの時代に創立された伝統をそのままベルリンで引き継いでいたのが、王立のヨアヒムシュタール校であり、それはフランスギムナジウムとともに王立ギムナジウムの一方の雄であった。殊に、王立学校は以前からプロイセンの官吏の養成機関として国策の見地から重要な役割を担わされていた。

メンツェルによれば、ヨアヒムシュタール・ギムナジウムはプロイセンが創設した官立学校ゆえに財政基盤に恵まれ、スコラの学風に立つとともに神学的素養を重視し、1604年創立以来の伝統の下で保守的な気風の学校であったとされる⁴⁾。

ズルツァーはギムナジウムでの彼の活動が始まると、やがて持ち前の旺

盛な探求心を發揮し、学校の現状と問題点を洗い出し始める。そしてそれだけにとどまらず、啓蒙の学徒らしく学校に潜む欠陥と不備の除去を求めて、改革の提言文書の作成にも着手し始めるようになった。

保守的な学校長ハイニウス（Heinius, Johann Philipp）と教師陣は、所轄官庁のやる気のなさも反映して、長い間、改革の必要性を認めず、ズルツァーと彼の理解者である査察官ザックらの勧告に背を向け続けていた。やがて学校側も重い腰をあげる素振りを見せざるをえなくなり、カリキュラムを組み直し、各教師の講義計画書を公表するなどの意向を示して、状況が好転しそうな時期もあった。だが、それでも、理事会当局への再三の要望にもかかわらず改善の歩みは遅々としたものであった。十年余りの時間が経過するなかで、改革の端緒は見せかけに過ぎなかったとする疑念が改革派の人々の間に拡がり始め、当局との亀裂がしだいに深まる事態となっていた。

長い歴史を誇っていた頑迷なギムナジウム当局との闘いで、この当時ズルツァーが精神的に追い詰められていたことは、彼が書き残した自叙伝に認められる次の心情吐露からも読みとれる。

「ギムナジウムで就いた私の職は、非常に不快なものでありました。そこで学んでいる大勢の若者には、好ましい規律の影さえ見えなかったし、わずかの権威を備えた教師も見あたりませんでした。そのため、教師たちはギムナジウムのきわめて専制的な学校長を盾に辛うじて権威を維持しようと試みていました。権威というものは自らの職務の力が自然と与えてくれるものであり、誠実で善良なし方をしていれば自ずと備わるものなのに、それを他の迂回する手段によって求めるやり方は、私の性分にまったく合わないものでした。〔改行〕それだから、真に心から彼らのために役に立ちたいと願ひ努めてみたのですが、何もうまく行きませんでした。かえって、実に多くの逸脱や混乱を黙って見守らなければならなかったのです。できるだけ私自身あれこれの対策を試みてみましたが、無駄骨でした。こうして、とうとう私にとって自らの職務が重荷になってしまいました

た。」⁵⁾

変化を好まぬ伝統的機構、合理的な理由をもって説明がつかない学校規則、そして暗記中心の教授法の改革などがとりわけ焦眉の課題であると彼は見做していた。それゆえ、生徒の指導においては「若者の知識欲を刺激し、注意力を鍛え、観察力と判断を鋭くし、道徳的感覚を活発にする」⁶⁾ ような教育内容と教授法への改善を願っていた。しかしながら、学校側は旧態依然としたやり方に固執し、職務に忠実な役人や牧師をただ漫然と供給するばかりで時間が無為に過ぎていった。

改革を是とする大王の意向が伝わった1760年頃になってようやく、教育内容に手が加えられる変化が生じた。まず手紙の書き方を練習させること等を内容とした、ドイツ語の授業が導入された。あわせて、論理学の科目が新設され、ギリシア語と歴史の授業時数も増えることになった。そして、このときからギムナジウムの最上級クラスの論理学の授業は、その担当をズルツァーに命じられた⁷⁾。

それでも結局のところ、ギムナジウムの古いスコラ的、神学的伝統に依存した組織と教育課程は挑む対象として堅牢でありすぎたようであった。彼らの提言策も、学校長ハイニウスの旧幣墨守的な姿勢のために見るべき進捗はなく、徒労感ばかりが募っていく結果となった。

「私の前任者ベギュリン氏が自由な意志によって辞職したように、なおも耐えるに値する特別の興味を私を持ちえていなければ、同様の運命を私も辿ったことでしょう。」⁸⁾

ズルツァーの胸中を塞いでいた悪い予感は結果的に適中する形で事態は推移した。変化の兆しがようやく少し現れた1760年春に、予期せぬ不幸が彼を襲ったのである。愛する妻の他界という突然の出来事に遭遇し、ズルツァーは精神の均衡を失う試練に直面してしまった。ついに彼の気力も限界の閾を越え、辞職を覚悟の上でプロイセン王に休暇を願い出た。その願いは病気療養として当局に受け入れられ、1762年の夏から翌年の3月まで、およそ半年間の郷里への帰省がこうして実現をみたのである。

Ⅵ. チューリヒへの帰省と若者のドイツ教養旅行

1. 二度目の帰省とチューリヒ学徒との親交

さて、40歳を越えてズルツァーがボードマー・プライティンガー門下の若きメンバー、とりわけペスタロッチャーとも親しい交友仲間であった青年たちと出会い、彼らとの間で濃密な交流が始まるのは、ズルツァーの二度目の帰省が機縁となった。そしてこの帰郷は、彼を仲立ちとしたチューリヒ学徒のドイツ教養旅行へと、事態は思わぬ進展を見せていった。

すでに一度目の帰省を、ズルツァーは1750年に果たしている。このときに彼はボードマーの求めに応じ、『メシアス』の構想を抱く詩人クロプシュトックを伴って、かつての恩師と仲間のもとへ帰る体験を持った。このときの旅には、チューリヒ出身の若きギリシア古典研究家シュルテス (Schultheß, J. G.) を同伴して帰郷したという⁹⁾。クロプシュトックにとってはボードマーらの正式な招待による訪問であり、チューリヒでは学生時代のズルツァーを親身になって世話をした、自然研究家ゲスナー (Geßner, Johann) の屋敷が宿として提供された。ボードマー、プライティンガー、パーザー (Waser, Johann Heinrich)、キュントズリー (Küntzli, Martin) らが競うようにして居所を訪れたという。チューリヒの伝記作者ヒルツェルの言葉によれば、「その友情を大事にする心情、終始変わらぬ陽気さ、そして追隨を許さぬ巧みな話術によって、彼らの仲間を幸せにした」再会だったとされる¹⁰⁾。

このチューリヒの旅の結果、ドイツ近代詩の祖としてのちに名の知られたクロプシュトックは、ズルツァーを仲立ちとしてボードマーの親しい友人となり、チューリヒとドイツの知識人交流に懸け橋をつなぐ象徴的な人物となった。新鮮な感覚にもとづき、理性に偏しないので永遠に向かうその作風は、スイスの友人たちの共感を得つつ創りあげたものだったと言える。

十二年後に巡ってきた、二回目のこの度の帰省では、郷里への最短の街道ルートをとらず、ボードマーと交流のあったスイスの知識人を訪ねなが

ら遠く迂回をする行路がとられた。バーゼルでは汎愛主義者のイーゼリンを訪ね、さらにベルンにまで遠廻りして、そこで重農主義者チッフェリ(Tschiffeli, Johann Rudolf)などを訪問し、親しく会談することになった(旅の行路は図-1に作図したので参照を乞う)。ちなみに、このあと十年ほどのちにスイスの代表的な啓蒙雑誌『エフェメリデン』を創刊し主宰したイーゼリンは、経済的に困窮していたペスタロッチーを文筆家として自立するように励まし、その著『隠者の夕暮』の成立過程に関わることになる。他方で、ベルン経済協会の創設者となったチッフェリは、模範農場を経営して世間の注目を集めていたが、ズルツァーが訪れた5年後の1767年に、ペスタロッチーを同所に住み込ませて農業指導をする役回りとなる¹¹⁾。チューリヒのカロリヌム校とその周辺だけでなく、ズルツァーが各地に残したこうした足跡は、やがてこの人物が次代の教育事業を志すペスタロッチーたちにとって決して無視しえない存在となっただろうことを物語る、好個の逸話と言える。

こうして久方ぶりに実現をみたズルツァーの帰郷は、幸いにも彼にとって故郷へ錦を飾るに相応しいものとなった。ヴィンタートゥールの仮の寓居には、面会を乞う者が引きも切らず詰めかけたといわれる。彼がボードマーの自慢の高弟であり、かつ筆頭の出世頭であるという評判によるところも大きかったが、それにも増して彼の明朗闊達で社交的な人間的魅力に与るところが大きかったであろう。のちにズルツァーはこのときの地元の知人・友人や学生による歓迎ぶりを回顧して、幸福な「黄金の日々」を故郷で過ごすことができた、と感慨深く述懐している¹²⁾。

このときズルツァーから異国の学問事情を聞き、薫陶を受けようと集まった人びとのなかに、ボードマーが中心になり結成した愛国的な政治組織「歴史-政治協会」(後に改名して「ゲルヴェ・ヘルヴェチア協会」となる前身の組織)の若き会員たちが混じっていた。彼らは大学の教師たちが主導する啓蒙革新運動に共感し、その活動に参画していた若者たちであった。

ボードマーらが指導したこの啓蒙的な組織には、のちにゲーテの友人として東部スイスの代表的な知識人として名声を高めたラヴァーター（Lavater, Johann Kaspar）、のちにマニエリズムの誇張技法を得意とする画家として大成したフュースリ（Füßli, Johann Heinrich）らがいた。とくにこの二人はともに在学中からボードマーの影響をつよく受け、政治的な愛国的運動に果敢に身を投じていた。なかでも芸術家気質で直情径行の性向があったフュースリは、州内の有力な役人の不正を糾弾して政府に文書で迫ったために危険人物視され、ズルツァーが一時帰国した当時には厳しい懲戒処分が不可避とみなされる状況にあった¹³⁾。そのためボードマーやプライティンガーらは相談し、ズルツァーの出立のさいに彼らを同行させる、事実上の国外退避策について密かに打ち合わせをしていたところであった。ラヴァーターの日記を見ると、このとき隣国での滞在先としてバルトのシュバルディンクの牧師館を推したのは、古典語教授で神学者のプライティンガーであったと書き留めている¹⁴⁾。この記録からも、この頃までに既にチューリヒ啓蒙主義の主導者たちと、プロイセン北部の啓蒙神学者の間で何らかの意見交流があったことが容易に窺い知れるのである。

こうして二人は幸運にも、ズルツァーのベルリンへの帰還の旅に同伴させてもらうことが決まった。このとき、ラヴァーターとフュースリはともに22歳の若さであった。旅の同行者には、その他に二人の青年が加わった。一人は1歳年少だが、彼らの共通の友人でつねに行動を共にしていたフェリックス・ヘス（Felix Heß）である¹⁵⁾。彼らと同じくチューリヒの牧師任職式を終えていて、ドイツから帰国後さっそく牧師になった人物である。もう一人は、彼らよりも7歳年長の数学者で、ベルリンまで馬車の相乗りを申し出たイエツラー（Jezler, Christoph）であった。イエツラーを除く三人の青年たちの約1年1カ月に及ぶドイツ滞在の旅は、この後、往路・復路の移動のためだけに約2カ月間を要し、フリードリヒ大王の居城都市ベルリンおよびバルト海に臨むボンメルンのバルトをその主たる滞在地とする、かなり長期にわたる教養旅行となったのである。

2. 若きチューリヒ学徒の教養旅行

ここで当時の事情を物語る記録などに基づき、三人の若者のベルリン、さらにバルトへの旅の行程を明らかにしてみたい。わが国でこの事実に言及した論著は見当たらないようであり、ラヴァーターの旅日記等の記述に依拠して、いささか委細をつくしてみよう¹⁶⁾。

(1) チューリヒからベルリンへ

その旅日記によると、ラヴァーターたちは見送りの友人や兄弟を伴って1763年の3月8日にチューリヒを出て、ヴィンタートゥールへと移動した。見送りにはラヴァーターの弟ディートヘルム (Lavater, Diethelm)、フュースリの弟でペスタロッターと親しいカスパー (Füßli, Hans Kasper)¹⁷⁾のほか、勉学中の学生を含めた友人たちが集まり、総勢は13名となった。旅行者は馬車で、他の者は馬を駆って伴走する一隊を組んだ。ヴィンタートゥールに着くと、地元の学校長キュンツリーや参事会執事バーザーなどを表敬訪問したあと、翌朝にはそこを午前5時半に出発している¹⁸⁾。ズルツァーはあるギムナジウム教授に会う約束のため、荷造りを若者たちに任せて先に旅立ち、ザンクトガレンで合流する手筈なのであった。些か不親切な御者を安く雇い入れて東方に馬車を走らせ、初日の夜はゴッサウに宿泊し、翌日の10日に馬車の轆 (ながえ) が折れる事故に遭いながら、ザンクトガレンに夜遅く到着したという¹⁹⁾。その夜は求める宿もなく、牛舎の隅で仮眠を余儀なくされたと記録にある。一足早く来て彼らを待っていたズルツァーは、この地のギムナジウムの哲学およびラテン語の教授であり、数年後に王立リッターアカデミーに招聘されることになったヴェーゲリン (Wegelin, Jakob) を若者らに紹介した。伶俐な頭脳と聡明な面立ちに地方の教師からぬ印象をもったラヴァーターは、感銘深くその仔細を日記に記している²⁰⁾。さい先の悪い馬車の事故が予感させるように、この後の悪路は旅人から記録を執る心の余裕を奪ってしまうことになった。ラヴァーターの旅日記は、残念ながらここからベルリンに着くまで中断されている。

その後の旅路の行程は次のようであった。一行はボーデン湖の東岸を廻り込む陸路でリンダウに着き、13日にそこで宿をとり、その後アウグスブルクを目差して北東へと街道を進んだ。そこで15日、16日の両日にかけて休養をとり、さらにニュルンベルク経由でフランケン地方を抜ける街道を北進した。ザールフェルトに到着したのが20日、翌日にはツァイツに出て、ライプツィヒに22日に到着した。そこで二泊し、一日かけてマクデブルクにまで辿り着き、24日と翌日の両日にわたりズルツァーの知人たちと過ごす時間をとった。そしてそこから最後の旅程を2日でこなし、ベルリンに着いたのは3月27日の夜も暮れた9時頃であったという。日記によると、その日はズルツァーの家に客人用のベットがなく、乾いた藁を敷いて冷たい床に寝たとある²¹⁾。

こうしてようやくベルリンに着いたラヴァーターたちは、その翌日からズルツァーに伴われて啓蒙の首都に住む知識人グループの要人や教会関係の重要人物に次々と出会うことになった。

若者たちが知り合えた主要な人物としては、ズルツァーの最大の理解者で、このときベルリンの大聖堂専属の説教師となっていたザックのほか、マリエン教会の説教師ディテリッヒ (Diterich, Samuel)、哲学者のメンデルスゾーン (Mendelssohn, Moses)、科学者のランバート (Lambert, Heinrich)、詩人のラムラー (Ramler, Karl Wilhelm)、芸術家のカンブリ (Kambli, Melchior) やマチウ (Matthieu, David)、さらに著述家で出版業者のニコライ (Nicolai, Friedrich) らが含まれていた²²⁾。他にまた、このとき紹介を受けた人物にはベルリン王立科学アカデミーの数多くの会員たちの名があった。後の復路で、彼らチューリヒの若者がクロプシュトックやグライムと知り合う運に恵まれたのも、もちろんベルリンに住むこの同郷の先輩の助力によるものであった。

このようにズルツァーは、同じ学窓出の先達らしい配慮で、将来のある後輩たちの見聞と視野を拓けるように努め、第一級の人物と交わることで志を高めさせる気遣いをみせたのである。この間の経緯をズルツァーの側

に視点を置いて言い換えるなら、同伴旅行から始まるその交流において、彼らとズルツアーが共に過ごした時間は長く、ベルリンへと戻る帰路の日数19日間に加えて、シュバルディンクが監督教区長として勤めていたバルトに向けて旅立つまでの約1月余り、さらに再び若者たちがベルリンに戻ってからの約1カ月の所要日数が数えられる。ズルツアーはこの期間、若き学徒の国外退避の機会を有意義なものにすべく時間を割き、一流の人物たちに会わせるために何かと心を砕いた。こうした彼の好意が大きな実を結ぶことを、のちに後世の人々は知ることになるのである。

(2) ベルリンからバルトへ

その後の若者たちの教養旅行の経路を、さらに辿っておこう。

青年たちは1カ月余りのベルリンでの滞在ののち、4月29日にそこを旅立ち、プレントラウとアングラムを經由して北上した。6日をかけてバルトへと辿り着いた。ラヴァーターとヘスは翌年の1月24日までそこに滞在し、フュースリは絵画の修業を目指してイギリスに渡る準備のため、秋にベルリンにもどることになった²³⁾。夏の盛りに、若者三人揃って近くのバルト海に臨む街シュトラールズントを訪れ、そこからリューゲン島へ廻る10日間の小旅行を試み、一夏の休暇を楽しむ余裕も見せている。

こうして、1年余りに及ぶ長期の滞在のうち、その大半を占める約9カ月間は、当時、神学者ないし道徳哲学の著述家としてその名が知られていた、バルトの首席牧師シュバルディンクのもとで過ごすことになった。この滞在について最初に提案をしたのが誰であったにせよ、ズルツアーとボードマーらの双方の了解の下で計画が推移したことは言うまでもない。このように、若者にとって法外ともいえる長期の居候が実現したのは、ボードマーらのチューリヒの指導者たちとズルツアーとの間で、他方でシュバルディンクとズルツアーとの間で、前者については思想的に共通の基盤に立った結びつきが、後者については深い信頼で結びあった親密な交友関係が存在したがゆえのことであり、それなくしてはもとよりこうした僥倖はあり得なかったであろう。

ズルツァーが50歳を目前にした1769年に、請われてマクデブルクの学校改革に関わったとき、委員会の構成委員にザックとシュバルディンクも名を連ねることになった²⁴⁾。殊に、マクデブルクの地に縁のなかったシュバルディンクの就任については、ズルツァーの意向を想定せずには考えにくく、彼らの友好的な結びつきとつよい精神的きずなが、その晩年まで続いていたことがこの一事からも窺えるのである。

(3) バールトからチューリヒへ

チューリヒへの復路の道順についても、概略をここで述べておこう。

バールトでの彼らの落ち着いた穏やかな生活は、シュバルディンクがプロテスタント教会の上級役員会の役員に任命され、ベルリンからの招聘を受諾したために終わりを告げた。その上京に合わせて若者たちも同行することになり、この地をあとにした。

その旅のベルリンまでの行路は、バールトからグライフスヴァルト、アンクラム、プレントラウを經由してベルリンへ着くルートを通った²⁵⁾。彼らは再びベルリンに戻り、1月29日から3月1日まで引き続き滞在した。この期間に新たに紹介され、面会が実現した人の数はさらに増えていった。

ついにベルリンを離れる日がきたとき、ラヴァーターとヘスは帰りの旅の途中でクロプシュトックなど数名の高名な詩人や文人・学者と会うため、既に帝都で待ちかまえていたフュースリと旅の日程を調整して、一緒に出発した。マクデブルクを經由し、最初の目的地はクロプシュトックの滞在地のクヴェトリンブルクであった。そこに3月4日から7日まで留まり、ボードマーとズルツァーの友人である詩人を、日を替え繰り返して訪ねることになった²⁶⁾。旅の間ずっとクロプシュトックの『メシア』を傍らに携えていたほど、この詩人に熱中していたラヴァーターが、二人の連れを無理やり巻き込みつき合わせた格好となった。7日にはすぐ、ハルバーシュタットまで移動して、ズルツァーを介してボードマーと書簡で交流していた詩人グライムを訪問している。そこからブラウンシュバイクに廻り8日と9日の両日、そこで啓蒙神学者のイエルーザレム（Jerusalem, Johann

Friedrich Wilhelm)、詩人で批評家のゲルトナー (Gärtner, Carl Christian) を表敬訪問し、ゴスラーを11日に經由して、ゲッティンゲンに到着したのは3月14日であった。ここからフュースリは二人と別れ、オランダ経由でイギリスへと旅立っていった。²⁷⁾

残された二人は、3月16、17の両日カッセルに留まり、フランクフルトには3月19日に到着した。その後、ライン川を遡る街道でシュトラースブルクに立ち寄り、さらに国境を越えてバーゼルに入った。そしてチューリヒに辿りついたのは、3月26日であった²⁸⁾。こうして約1年と1カ月を要した国外避難と外国見聞を兼ねた若者たちの修業旅行は、ようやく終わりを迎えることになった。

【図一】 1762年のズルツァーによるスイス帰省旅行の往路



*本図は“ESRI Data & Maps 2005”を活用して作成。ズルツァーのたどった順路を北から南へ実線で示した。
(移動期間については、ズルツァーの自叙伝では「1762年の夏」と記され、日時は特定しえない。)

〔図一2〕ズルツァーに同伴1.カラヴァータームのドイツ教養旅行の往路



*実線は三人のたどった順路を指す。
 (チューリヒ発1763年3月8日、ベルリン着3月27日、同地発4月29日、
 パルト到着推定5月4日。)

〔図一3〕カラヴァータームのドイツ教養旅行の復路



*実線は三人のたどった順路、破線はフェースリのみの行路を指す。
 (パルト出発1764年1月24日、ベルリン着1月29日、同地発3月1日、チューリヒ
 着3月26日。なおフェースリは、3月14日に仲間とグッティンゲンで別れ、オランダ
 のデン・ハーグを経てイギリスへと渡る。)

VII. バールトとベルリンの啓蒙の先達

1. シュバルディンクと彼の若者批評

さて、遠方のチューリヒから思いがけなくも舞い込んだ居候を受け入れたバールトの主人、シュバルディンクの彼らへの対応と、北部ドイツの知識人としてのその若者評を窺い知る記録があれば、ここに紹介するのが順当なことだろう。

シュバルディンクはある時期から、自らの人生を回顧した自叙伝風の記録文を書き溜めていた。それは1757年12月に最初の日付が入り、1804年の死没まで続いた。彼が亡くなってから、息子のゲオルク・ルデヴック (Spalding, Georg Ludewig) が手を入れ、1804年にハレのヴァイゼンハウス書店からそれは出版された。その自伝が、アルブレヒト・ボイテル編集の『シュバルディンク著作集』に『生涯の記録』²⁹⁾として収録されており、以下、それを参照しつつ考察を加えておこう。

三人の若者の滞在について触れている1763年の頃の回想は、「1787年8月にひき続き記載」と日付が入っている。そのとき、既に朋友ズルツアーは1779年に他界して、物故者となっていた。ここで記された内容はよく整理されており、書き出しの箇所は次のように始まる。

「当時まだ活発であった私の小さな4人の子どもと過ごす楽しみを除くなら、私の家は1年ほどはずっと寂しい状態で、私の心も虚ろでありましたが、1763年の春に、3人の若者がしばらくの間私のところに滞在するためにやって来ました。彼らがこの地方で人々の注目を浴び訝しく思われたにしても、彼らの訪問は実際大いに私の日々の生活を愉しいものにしてくれたのでした。」³⁰⁾

この後で、彼は三人の若者の名を挙げ、バールトへの国外退避の計画が、ズルツアーの「唆し」的な進言によるものとする世評の判断を紹介しつつ、事の起こりに言及する記述をしている。なぜ厳しい懲戒が市当局から下されるに至ったかについては、ラヴァーターの娘婿であるゲスナー (Geßner,

Georg) が伝えた情報を、自叙伝の原著の脚注は引き合いに出している³¹⁾。ゲスナーが記したところでは、当時、汚職に手を染めていたチューリヒ州の有力な役人グレーベルの不正を糾弾すべく、フュースリらが告発を計画したことに端を発した事件であったことを詳らかにしていた。

「ラヴァーター、フュースリ、ヘス、そのうち前者の二人はすでに牧師任職を終了していたのですが、今は亡きズルツァーの勧めにより、いや、むしろ世の人々は唆（そそのか）しと言うかもしれませんが、彼らのために公的機関で下される祖都市からの退去命令を先回りして実行するために、数か月間パルトの私の許で過ごすように彼が取り計らったのです。その客人の名前と彼らが為し遂げた仕事は、後に知らない人がいないほどです。」³²⁾

この『生涯の記録』では、三人の若者の外見や人柄がシュパルディンクの目にどう映っていたか、自伝の後続の箇所で彼の評価が率直に語られているので引用しておこう。

「彼らはそれぞれが個性的でした。フュースリは、スイスの有名な画家でかつ優れた著述家の息子でした。彼はその部門では当時すでに十分学術的な知識を持ち、だがまた、その考え方やふるまい方においては、しばしば大きく旧来のやり方を超えて、新奇の独創性を追求める想像力や強い意志という、本当に強く激しい情熱を持ちあわせていました。そのため、生来の恵まれた素質によって、時の経過とともに彼の父の芸術の世界にすっかり熱中しているところでした。」³³⁾

これには、1787年の時点からの回顧としての記述がさらにこう続く。

「彼はそれまで二人の友人と3カ月一緒に過ごしてきて、ボンメルンでさらに6カ月滞在してから、われわれの許から去りました。当地で彼は、パイトマン書店のために『モンタギュー夫人の手紙』³⁴⁾を翻訳しました。その後、若いイギリス人と共にフランスに旅立ち、さらにはかなり長い時期に亘ってローマで芸術を学び、そしてその後はロンドンで暮らしています。ロンドンでは彼は、実行力旺盛で、ほぼすべてのものをカリカチュアにしてしまう彼の天賦の才を、一部は絵画やデッサンにおいて、一部は幾つか

のドイツ詩、英文による『J.-J.ルソーの特質と業績に関するエッセイ』(Essay on the Character and the Works of J.-J. Rousseau.)などの文学上の諸作品において発揮しています。』³⁵⁾

ここでの人物評では、彼ら若者がスイスで高等教育を受け、それぞれの分野で学問的素養を備えもっていることをシュバルディンクが率直に認め、高く評価している点が目を惹く。あわせて、彼らがスイス東部の啓蒙主義運動に参加する者の使命感から、このとき既に文筆活動への強い興味を共有し、実際に著述出版につながる活動を誰もが始めており、そのことをシュバルディンクが注意深く書き留めている点にも注意すべきであろう。

彼らのなかで一番若いヘスについての記述においても、その文筆活動に言及しながら、この若者が不幸にも早く他界したことに触れて、このように述べている。

「ヘスも彼らと同様に、学問によく通じ、純粋で正しい分別に恵まれる一方、熱情的な感激家というよりも、道徳と宗教について大変温かい感情を備えもっていました。私のベルリンへの赴任後、そう長く経たないうちに彼が私宛てに届けてくれた手稿、『哲学的・道徳的説教のための着想』、ならびにまた、彼の死後私が編集シミリウスのもとで印刷させた、小さな『説教集』がそのことをよく示しています。』³⁶⁾

この後、それぞれの人柄の個性的特質について鋭い洞察を見せた記述が挿入されており、読む者にとって大変興味深いものとなっている。とくにこの仲間集団の凝集性にひそむ力学的な特徴を、筆者なりに分析した次の批評部分とはくに注目に値する。

「ヘスの早い死によって、世界は多くのものを失ってしまいました。そしてその喪失のなかに私が数え入れたいのは、ラヴァーターの最も信頼する友人である彼が、より思慮深くより冷静な分別によって、友人の多くの風変わりさを、たぶん自制させる働きをしていたことです。友人の方は後になって大変な評判を獲ち得るのですが、全体としていえば、当人自身はあまり有用性の基準では秀でていなかったのです。一風変わったところが

あるラヴァーターは、当時の他の二人にとってある程度において、確かに「オラケル」（絶大な信頼を寄せる人物—引用者注記）であり、リーダーでありました。ほかの二人は多少のごく些細な外面的な事柄³⁷⁾にはまったく頓着せず、ほとんど子どもっぽい流儀で彼を高く評価し、一目置いていました。その結果、その付き合いのあらゆる点で内面的で仲のよい親密さが彼らの関係を満たしていました。かつては、そういった外観・外見の類に神経質に注意を払うことは、まずは上等なことと見做されにくかったわけです。」³⁸⁾

シュバルディンクは、このようにこの三人の固い朋友的結束の中心にいるのがラヴァーターであったことを見抜いていた。ここでの風変わりと評する性格描写は、一般に流布する大衆向けの人評伝が伝えるように、彼の決して端正とはいえない外見的な容貌、世事・世俗の瑣末な事柄に対する無頓着なだらかさ、逆に強い道徳的、形而上的な志向性を指していたはずである。それらが当時、一部の人に強い記憶を残していたことにこれは裏づけを与える批評となっている。それでも、次に見るように、シュバルディンクにとってラヴァーターに対する全体的な評価はきわめて高いものであった。彼はこの若者の卓越した素質と人柄に触れて次のように述べている。

「このときまで私は、こんな若者にまだ会ったことがありませんでした。とりわけ自信をもって付言したいのは、ほんの21歳を越えたばかりのあの年齢で、あのような魂の純粹さを持ち、あのような道徳的感情をいきいきと躍動させ、あのような奥深い内的感受性の率直なほとばしりに満ちていて、もちろんふだんそれを抑えて人に慎み深くするときには、それも容易くこなせ、あらゆる交際相手にあのような朗らかな優しさと配慮を示すことができる若者であるということです。要するに実に品があり、感じのよいキリスト教信仰を備えもっている、このような若者に私はこれまで一度も会ったことがなかったのです。それにしても、この当時彼の内心のすべての温かい活気は、教養があり、熟慮に富み、落ち着いた理性に

よって十二分に統御されており、そこには夢想家へと傾く性癖の片鱗さえも見いだすことはできませんでした。

そのことは、クルゴットの『孤独なキリスト教徒』への弁護の著述、『若きバールト宛の二つの書簡』（Carl Friedrich Bahrdtについて、当時はまだ非正統派的な立場であったと注釈がある—引用者注記）が十分に証明しています。それをラヴァーターは私の許に滞在していたときに書き、プレスラウで印刷したのです。そして、彼が私の家に住み、お互いに近くにいて、少なくとも多くの時間を共に過ごした新鮮な数カ月の間、私はずっと彼という人物をこのように理解していました。³⁹⁾

1787年に出版を意識して書かれたであろう文章が、この後にこう続く。

「彼がその後どのような人物になったかは、私よりも読者がよくご存知でしょう。そして、どのようにして彼がそのようになりえたかについては、本人ではない他人が述べたところで十分に説明することはできないに違いありません。」⁴⁰⁾

ここでのシュバルディンクのラヴァーター評は、歴史上の人物を語るに相応しい秀逸のものであろう。ラヴァーターが高等教育を終えて間もない年齢でありながら、周囲の耳目を惹く才知の持ち主であったことは、仲間の「オラケル」という呼称だけで十分に伝わってくる。だが、ここで力点が置かれているのは会話を通して人を魅了する知的才覚だけでなく、それ以上に、交わる者が共感せずにはられない明朗な人柄、若者らしい道徳的純粋さ、そして形而上学的素養の裏づけのある内面的な優しさなどの、人を引きつける魅力としての社交的資質がここではとりわけ力説され讃えられていることである。

人の苦境を見捨てていられないこの人物の内面の優しさという点では、彼の年下の友人であったペスタロッチーとの関わりをつよく想起させる。リートケなどの伝記を繙くと、ペスタロッチーが恋におち、恋人アンナの両親シュルテス夫妻の理解がえられず彼らが苦境に陥ったとき、親身になり仲介の労をとろうとしたのは他でもなくラヴァーターその人であった。

また花婿として経済的困窮に陥りかけたときにも、キルヒベルクのチツフェリに農業修業を依頼し承諾を得る仲介役を果たしたのも、この年長の友人であったのである⁴¹⁾。

こうしたシュバルディンクの人物評からは、ラヴァーターがつねに私心なく行動し、周りの人たちに与える好感と温かく配慮的に関わる活発な社交性によって人望をあつめ、そして人の上に立っていく天分に早くから恵まれていたことが率直に語られていると言える。その後、こうして年齢不相応の見聞をひろめることができ、人脈のネットワークに恵まれたこの若者は、1768年に孤児施設教会の牧師に就いたことを皮切りに出世の階段をかけのぼり、やがて伝統のある聖ペーター教区教会の牧師職に就任する運命がこの後、拓けてゆく。一方、「心の友」としてつねにラヴァーターの傍にいたヘスは惜しまれながらも夭逝し、フェースリは1778年の一時帰国を除いて国外にずっと留まることになった。

2. ベルリン啓蒙グループの要人 —ズルツァーとシュバルディンク—

ラヴァーターの日記によると、こうしてこのバルト海沿岸小都市で、牧師館の主人の啓蒙家的な友愛と教育的な配慮によって安らぎの場を得た彼らは、ハラー (Haller, Albrecht von) やクロプシュトックを初めとしてさまざまな詩人や作家の作品に触れるとともに、熱心にシュバルディンク、ライマールス (Reimarus, Hermann Samuel) らの神学者や宗教家の著作を繙きメモ書きを取るようになった。その読書の範囲はドイツやスイスだけでなく、イギリス、フランスの重要な思想家や著述家の著作にも及び、ライプニッツ、バウムガルテン (Baumgarten, Alexander Gottlieb)、ランバート、ツインマーマン (Zimmerman, Johann Georg)、シャフツベリーなどの人物名と書名が日記には書き留められている。また、夜の食事時にはルソーやヴォルテール、ヒューム、ゴットシェート (Gottsched, Johann Cristoph) などがたびたび話題となり、賑やかに意見が交わされたことも若者の旅日記から知られるのである⁴²⁾。

ちなみに、シュバルディンクの自然賛美と理神論的アルトルイズムを混在させた独特の宗教観を知りうる手がかりとして、ラヴァーターの日記に記された牧師館の主人との次の会話が参考になるだろう。

「シュバルディンク氏はまったく揺るぎのない確信と、最も純粋な誠実さをもってこう語りました。『神の全智全能の直接的で実体的な影響を、人間の心のなかに無理に想定する必要はありません。それでも、私たちはあらゆる瞬間において神の助けによって、そしてその神聖な精神によって守護されています。というのは、自然の体系に由来するすべての働きには、最も本来的で、そして最も精密な理性が働いているという意味で、自然は神の働きなのであり、神の意志の顕現なのだからです』、と。』⁴³⁾

ここで若きラヴァーターが書き留めたシュバルディンクの言葉には、この神学者に固有の宗教観の核心が凝縮して語られていることに注目したい。そして、この点で重要なのは、早くはボードマー・プライティンガーが『画家談論』(1721年)で構想し、のちに『批判的詩学』(1740年)の公表によりゴットシェートらと対立する緊張を惹き起こした、東部スイスの啓蒙主義的な宗教理解に近いものがここに披瀝されているのを見てとれることである⁴⁴⁾。それだからこそ、ボードマーの高弟ズルツァーとシュバルディンクは親しくなりえたのであり、互いに知己を得てから生涯続いた彼らの親交をうまく説明するには、こうした同一の響き合う思想傾向が、似た者同志を引き寄せあったという事実に着目する必要があるだろう。

ボードマーとプライティンガーが『批判的詩学』等において表明していたのは、神は創造的自然に、その普遍的神性の顕現として摂理の全権を与えるとともに、人間に対しても理性という尊厳ある本性を与え、より完全な姿に向かう可能性を贈与していると思ふ世界観的信念であった。人間は有限で不完全な存在ではあるが、神の善意と自然世界が宿す完全性(Vollkommenheit)を模範とし、自然の完全なる規範性を手がかりにすれば人間に賦与された可能性としての諸力の完全化と、道徳的・人格的向上の使命に向けて努力することができるとする見解である⁴⁵⁾。それは言う

までもなく、ライプニッツ＝ヴォルフ哲学における最善観思想の中心主題にはかならない。もとより、その無批判な追従者としての姿勢が問われ、ヴォルフ以後の啓蒙哲学思潮が一般に通俗哲学と低く評価される時代が訪れるには、いましばらく時を経なければならなかった。

しかし他方でまた、このチューリヒ啓蒙思想においては従来の啓示信仰と対決しつつ、それを理性を介した可能的世界として世俗化し、啓蒙理性と宗教感情を融和させようとする、啓蒙の合理主義に収まり切らない心情主義的なイギリスの哲学思想との親和性が顔を覗かせていることも、もう一つの重要な特質として忘れるわけにいかない。

具体的な人物への関心としてたびたび彼らが語っていたのが、シャフツベリー三代伯とデビッド・ヒュームの人物とその著作への共感的評価であり、事実彼らはそれぞれその最初のドイツ語への翻訳者となったのである。

シュバルディンクは、シャフツベリー三代伯の『モラリストたち』(*The Moralists, A Philosophical Rhapsody*, 1709.) を1745年に独語訳し、ベルリンのハオデ書店から出版している。また、『徳に関する研究』(*An Inquiry Concerning Virtue*, 1711.) も、訳者序文を加えて1747年に翻訳の刊行にこぎつけている⁴⁶⁾。

他方で、ズルツァーはデビッド・ヒュームの『人間知性についての哲学的試論』を序文・注解付きで1755年に翻訳し、ハンブルクから出版した。ドイツ圏の知識人たちに、ヒュームの「懐疑によって新たな活動へ踏み出して欲しい」と、翻訳に着手した意図を友人宛ての書信で語っている⁴⁷⁾。また、ヒュームの『道徳原理研究』の第三部を訳出した“*Sittenlehre der Gesellschaft*”が今日レクラム文庫に収録されており、1756年に刊行されたその独訳初版についても、訳者はズルツァーと推定されている⁴⁸⁾。

上述したこうした思想的特徴は、イギリスのシャフツベリーやヒュームらの道徳感情説にも共鳴していく思想契機であり、それはボードマーらのスイス啓蒙主義の主導者たち、その弟子ズルツァー、そしてシュバルディンクの、これら三者がそれぞれ共有している思想的志向性と言いうるもの

であった。

こうして、シュバルディンクがベルリンの新教教会の上級役員会を構成するメンバーとして招聘されてから、ズルツァーとその友人は心の盟友としてより親交を深め、同時期に「月曜クラブ」(のちに「ベルリン水曜会」へと発展)の構成員となる。この組織は1749年にベルリンで設立された協会で、プロイセン官僚、学識者、文筆家、芸術家などの啓蒙の志をもった人士の集まりであった。会員は限定されていたが、月曜の会合に自由に友人を連れてきて様々な話題について会話を交わすことができたという⁴⁹⁾。ともにベルリンの啓蒙主義者グループの要人として確乎たる位置を占めたことで、スイス東部の啓蒙主義の風がプロイセンのドイツ北部へと流れ込む、確かな窓口がここに開かれたと見ることができる。シュバルディンクがラヴァーターらを連れて帝都に入った1764年が、その一つの節目の時期になったのである。

(中篇 了)

註

- 1) ベスタロッチーの前期思想の形成過程を研究テーマとする場合、啓蒙の時代思想との影響関連の究明を避けて通れないだろう。先行研究史においてはシャフツペリー、ライプニッツ・ヴォルフ哲学、ルソー、カント、敬虔主義などが主に注目されるなかで、ズルツァーとベスタロッチーの共通の師ボードマーや汎愛主義者イーゼリンをはじめとするスイス啓蒙哲学についての研究はまだ十分になされていないと言ってよい。なかでも、ボードマーの高弟ズルツァーとの関係を取り上げた論文は、M.デーネをはじめとしてまだごく僅かである。本研究では、ベスタロッチーがズルツァーと結びつく接点をボードマーの交友圏から洗い出し、ズルツァーらの関連一次史料をもとに、この時代の思想圏の緊密な結びつきについて、その実相に接近することを目指している。

上掲の問題視角からズルツァーを取り上げた先行研究として以下のものがある。
Stettbacher, H. : *Beiträge zur Kenntnis der Moralpädagogik Pestalozzis*, Zürich 1912. Dähne, M. : *Joh. Georg Sulzer als Pädagog und sein Verhältnis zu den*

- pädagogischen Hauptströmungen seiner Zeit*, Leipzig 1902. 上畑良信「初期ペスタロッチー思想の汎愛主義との関連」『長崎県立女子短期大学研究紀要』第41号、1993年12月。上畑良信「J. G. ズルツァーからJ. H. ペスタロッチーへのスイス教育思想の生成と展開（一）」『長崎県立大学論集』第33巻第2号、1999年9月。上畑良信「チューリヒ啓蒙思想と近代教育への一系譜—ズルツァーからペスタロッチーへの見失われた連環」、小笠原道雄監修『近代教育思想の展開』福村出版、2000年。上畑良信「チューリヒ啓蒙主義の系譜とJ. G. ズルツァー（前篇）—マクデブルク時代の出会いと自己形成—」『長崎県立大学論集』第40巻第4号、2007年3月。
- 2) J. G. Sulzers *pädagogische Schriften*, mit Einleitung und Anmerkungen von Klinke, W. (*SpSvK*), Langensalza 1922, S. 9.
 - 3) A. a. O., S. 10.
 - 4) Mentzel, Friedrich-Franz: *Die Tätigkeit Johann Georg Sulzers am Joachimsthalschen Gymnasium von 1747-1773*, in: *Gesellschaften-Studien* (Humboldt-Universität zu Berlin), Heft 8, 1990, S. 7.
 - 5) J. G. Sulzer, *Lebensbeschreibung*, Berlin und Stettin 1809, S. 26f.
 - 6) J. G. Sulzer, *Vorübungen zur Erweckung der Aufmerksamkeit und des Nachdenkens*, Vierter Teil, Zum Gebrauch der Lehrer, Berlin 1782, S. 3.
 - 7) J. G. Sulzer, *Lebensbeschreibung*, S. 31.
 - 8) A. a. O., S. 27.
 - 9) *SpSvK*, S. 11.
 - 10) Hirzel, Hans Casper: *Hirzel an Gleim über Sulzer den Weltweisen*, Erste Abteilung, Zürich und Winterthur 1779, S. 139.
 - 11) Liedtke, Max: *Johann Heinrich Pestalozzi*, Hamburg 1968, S. 36, 40.
 - 12) Vgl. *SpSvK*, S. 15.
 - 13) Liedtke, M., a. a. O., S. 25f.
 - 14) *Johann Kasper Lavater Reisetagebücher*, Tagebuch von der Studien- und Bildungsreise nach Deutschland 1763 und 1764, hrsg. von Horst Weigelt, Teil I, in: *Texte zur Geschichte des Pietismus*, Bd. 3, Vandenhoeck u. Ruprecht, Göttingen 1997, S. 3.
 - 15) フェースリ研究者のハニツヒは、告発文書の公表にフェースリだけでなく、へ

スとラヴァーターも関わったと述べている (Hannig, Peter: *Johann Heinrich Füßli*, VEB Verlag der Kunst, Dresden 1986, S. 4.)。なお、ヘスについてシュパルディングは、「ラヴァーターの最も信頼を寄せた友人」と記述している (註29 文献. S. 152)。

- 16) この旅においてラヴァーターらが辿った行路は、作図して本稿に資料として掲げたので参照を乞う (図-2, 3)。図-1と同様、旅の順路を示すために主な宿泊地を線で結んで作図した。ただし、当時の街道を示す図ではない。
- 17) *J. K. Lavater Reisetagebücher*, Teil I, S. 77, 329. 編集者が付した77頁の脚注には、フュースリの弟と記しつつ父の名を挙げて *Johann Casper* とした誤植が認められる。生存期間を (1743-1783) と明記しているので、校正ミスと判断される。329頁の脚注が正しい表記であろう。なお画家として名を成した兄フュースリの実弟、*Hans K(C)asper* は年齢がペスタロッチャーに近く、両者は竹馬の友といつてよい間柄であった。ペスタロッチャーの『育児日記』には、カスパーがペスタロッチャーの息子に対する性急な子育てを心配し、啓蒙の時代特有のジャーゴンを用いてその浅慮な態度を戒めたことが記されている。
- 18) *J. K. Lavater Reisetagebücher*, Teil I, S. 16.
- 19) Ebenda.
- 20) *J. K. Lavater Reisetagebücher*, Teil I, S. 17.
- 21) Ebenda.
- 22) *J. K. Lavater Reisetagebücher*, Teil I, S. 4f, 33, 37f, 39f, 44, 51f, 756.
- 23) A. a. O., S. 3f.
- 24) Förster, Uwe: *Unterricht und Erziehung an den Magdeburger Pädagogien zwischen 1775 und 1824*, Frankfurt an Main, Peter Lang GmbH, 1998, S. 61.
- 25) *J. K. Lavater Reisetagebücher*, Teil I, S. 4.
- 26) A. a. O., S. 80f.
- 27) *J. K. Lavater Reisetagebücher*, Teil I, S. 4, 800f.
- 28) Ebenda.
- 29) J. J. Spalding, *Johann Joachim Spaldings Lebensbeschreibung von ihm selbst aufgesetzt*, in: *Johann Joachim Spalding, Kritische Ausgabe*, hrsg. von Albrecht Beutel, Erste Abteilung: Schriften Bd. 6 : Kleinere Schriften 2, Tübingen, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) 2002.

- 30) *J. J. Spalding, Kritische Ausgabe*, Erste Abt., Bd. 6 (2), S. 151.
- 31) Ebenda.
- 32) Ebenda.
- 33) *J. J. Spalding, Kritische Ausgabe*, Erste Abt., Bd. 6 (2), S. 151f.
- 34) *Briefe der Lady Montague*. 1716年から1717年にかけて書かれた、駐トルコ大使夫人だったメアリー・モンターギュ夫人の『トルコからの手紙』の一部を翻訳出版したものである。
- 35) *J. J. Spalding, Kritische Ausgabe*, Erste Abt., Bd. 6 (2), S. 152.
- 36) Ebenda.
- 37) ラヴァーターはその容姿容貌を評すれば決して端正とはいえず、世間並みでもなかった。そうした世評の外見的な判断と、世事・世俗に対し恬淡に見えることを敢えてここでは指摘している。
- 38) *J. J. Spalding, Kritische Ausgabe*, Erste Abt., Bd. 6 (2), S. 152f.
- 39) A. a. O., S. 153. クルゴットはシュレージェン地方の牧師Martin Crugot (1725-1790) のことであり、彼の著書 *Der Christ in der Einsamkeit* は評判を呼び、ドイツで版を重ねるだけでなく、フランス語にも翻訳して出版された。
- 40) Ebenda.
- 41) Liedtke, M., a. a. O., S. 31, 43.
- 42) *J. K. Lavater Reisetagebücher*, Teil I, S. 56ff.
- 43) A. a. O., S. 61.
- 44) Meid, V. (Hrsg.), *J. J. Bodmer u. J. J. Breitinger, Schriften zur Literatur*, Stuttgart 1980, S. 83ff.
- 45) Ebenda.
- 46) *J. J. Spalding, Kritische Ausgabe*, Erste Abt., Bd. 6 (2), S. 127, 132, 322.
- 47) *Hirzel an Gleim*, Erste Abt., S. 209.
- 48) Hume, D: *Eine Untersuchung über die Prinzipien der Moral*, Philipp Reclam jun., Stuttgart 1984. S. 74.
- 49) 戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人：フリードリヒ・ニコライ』潮文社、198-199頁参照。

参考文献

- Johann George Sulzers vermischte philosophische Schriften*, Erster Teil, Leipzig 1773.
- Johann George Sulzers vermischte philosophische Schriften*, Zweiter Teil, Leipzig 1781.
- Johann Georg Sulzers Versuch einiger moralischen Betrachtungen über die Werke der Natur*, mit einer Vorrede von A. F. W. Sack, Berlin 1750.
- Sulzer, J. G., *Versuch einiger vernünftigen Gedanken von der Auferziehung und Unterweisung der Kinder*, Zürich 1745.
- Sulzer, J. G., *Versuch von der Erziehung und Unterweisung der Kinder*, Zürich 1748.
- Johann Georg Sulzers Lebensbeschreibung*, von ihm selbst ausgesetzt. Aus der Handschrift abgedruckt, mit Anmerkungen von Metian, J. B. und Nicolai, F., Berlin/Stettin 1809.
- Blanckenburg, Friedrich von: *Einige Nachrichten von dem Leben und den Schriften des Herrn Johann George Sulzer*. in: *Johann George Sulzers vermischte philosophische Schriften*, Zweiter Teil, Leipzig 1781.
- Johann Georg Sulzers Pädagogischen Schriften*, mit Einleitung und Anmerkungen von Willibald Klinke, Zürich 1922.
- Morf, H. : *Johann Georg Sulzer, Ein Lebensbild*, Neujahrsblatt der Hilfsgesellschaft von Winterthur, Winterthur 1863.
- Briefe der Schweizer Bodmer, Sulzer, Geßner*. Aus Gleims literarischem Nachlasse, hrsg. von Körte, W., bei Heinrich Gessner, Zürich 1804.
- Hirzel, Hans Casper: *Hirzel an Gleim über Sulzer den Weltweisen*, Erste Abteil. Zürich und Winterthur 1779.
- Dähne, Maximilian: *Joh. Georg Sulzer als Pädagog und sein Verhältnis zu den pädagogischen Hauptströmungen seiner Zeit*, Inaugural-Dissertation, Leipzig, 1902.
- Johann Joachim Spalding, Kritische Ausgabe*, Erste Abt., Bd. 6-(2), hrsg. von Beutel, A. und Jersak, T., Kleinere Schriften 2: *Brief an Gleim, Lebensbeschreibung*, J. C. B. Mohr Tübingen 2002.

- Johann Joachim Spalding, Kritische Ausgabe*, Erste Abt., Bd. 1, hrsg. von Beutel, A. und Kirschkowski, D., Prause, D.: *Die Bestimmung des Menschen*, Mohr Siebeck Tübingen 2006.
- Johann Joachim Spalding, Kritische Ausgabe*, Erste Abt., Bd. 6(1), hrsg. v. Söntgerath, O., Kleinere Schriften 1: Mohr Siebeck Tübingen 2006.
- Müller, Nadine: *Selbstbestimmung bei Johann Joachim Spalding—Analyse eines Textes*, GRIN Verlag, Norderstedt 2003.
- Pestalozzi, J. H., Sämtliche Werke, Krit. Ausgabe*, 28 Bände, Berlin 1927-56, Zürich 1968-80.
- Pestalozzi, J. H., Sämtliche Briefe*, 13 Bände, Zürich 1946-71.
- Stadler, P., *Pestalozzi, Geschichtliche Biographie*, 2 Bände, Zürich 1988, 1993.
- Liedtke, M., *Johann Heinrich Pestalozzi*, Hamburg 1968.
- Meid, V. (Hrsg.): *Johann Jakob Bodmer, Johann Jakob Breitingen, Schriften zur Literatur*, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1980.
- Bender, W.: *J. J. Bodmer und J. J. Breitingen*, Stuttgart 1973.
- Johann Kaspar Lavater Reisetagebücher, Tagebuch von der Studien- und Bildungsreise nach Deutschland 1763 und 1764*, hrsg. von Horst Weigelt, in: *Texte zur Geschichte des Pietismus*, Bd. 3, Vandenhoeck u. Ruprecht, Göttingen 1997.
- Johann Caspar Lavaters ausgewählte Werke*, Bd. 3-4, hrsg. von Staehelin, E., Zürich 1943.
- Weigelt, H.: *J. K. Lavater, Leben, Werk und Wirkung*, Göttingen 1991.
- Jaton, Anne-M., *Johann Caspar Lavater*, Zürich 1988.
- Giering, K.: *Lavater und der junge Pestalozzi*, in: *Pestalozzi-Studien*, Bd. III, Berlin/Leipzig 1932, S. 73f.
- Antal, Frederick: *Füssli Studien*, VEB Verlag der Kunst, Dresden, 1973.
- Hannig, Peter: *Johann Heinrich Füssli*, VEB Verlag der Kunst, Dresden 1986.
- Hume, D., *Eine Untersuchung über die Prinzipien der Moral*, übersetzt von Gerhard Streminger, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1984.
- Leibniz., G. W.: *Philosophische Werke*, hrsg. von Buchenau, A. /Cassirer, E., Bd. 1, Leipzig 1924.

- Wolff, Ch.: *Vernünfftige Gedanken von den Absichten der natürlichen Dinge, den Liebhabern der Wahrheit*, Dritte Auflage, Frankfurt/Leipzig 1737.
- Wetzel, Erich: *Die Geschichte des Königl. Joachimsthalischen Gymnasiums 1607-1907*, in: Festschrift zum Dreihundertjährigen Jubiläum, Erster Teil, Buchh. des Waisenhauses, Halle 1907.
- Festschrift des Königlichen Joachimsthalischen Gymnasiums*, veröffentlicht von dem Lehrer-Collegium des Königlichen Joachimsthalischen Gymnasiums, Zweiter Teil, Weidmannsche Buchh., Berlin 1880.
- Mentzel, Friedrich-Franz: *Die Tätigkeit Johann Georg Sulzers am Joachimsthalischen Gymnasium von 1747-1773*, in: Gesellschaftswissenschaften-Studien (Humboldt-Universität zu Berlin), Heft 8, 1990.
- Weber, L., *Pädagogik der Aufklärungszeit*, Frauenfeld/ Leipzig 1941.
- Hager, F-P., *Aufklärung, Platonismus und Bildung bei Shaftesbury*, Bern/ Stuttgart/Wien 1993.
- Förster, U.: *Unterricht und Erziehung an der Magdeburger Pädagogien zwischen 1775 und 1824*, Peter Lang, Frankfurt a. M. 1998.
- Erler, M., *Zürich in der Jugendzeit Pestalozzis*, Langensalza 1919.
- Widmer, S., *Illustrierte Geschichte der Schweiz*, 2. Aufl., Zürich 1971.
- Schneiders, W. (Hrsg.): *Lexikon der Aufklärung, Deutschland und Europa*, München 1995.
- Weigl, E.: *Schauplätze der deutschen Aufklärung, Ein Städtrundgang*, Hamburg 1997. エンゲルハルト・ヴァイグル (三島憲一・宮田敦子訳) 『啓蒙の都市周遊』岩波書店、1997年。
- 上畑良信「J. G. ズルツァーからJ. H. ベスタロッターへのスイス教育思想の生成と展開(1)」『長崎県立大学論集』第33巻第2号、長崎県立大学学術研究会、1999年9月。
- 上畑良信「チューリヒ啓蒙思想と近代教育への一系譜－ズルツァーからベスタロッターへの見失われた連環」、小笠原道雄監修『近代教育思想の展開』福村出版、2000年。
- 津田保夫「ドイツ啓蒙主義における『人間の使命』の問題：シュバルディングの『人間の使命』とその影響」『ドイツ啓蒙主義研究』（大阪大学言語文化学部・大

学院言語文化研究科編集）第2号、2002年3月。

福田覚「ベルリンのズルツァー：その生涯と活動の振幅をめぐる素描」『ドイツ啓蒙主義研究』（大阪大学言語文化学部・大学院言語文化研究科編集）第5号、2005年5月。

上畑良信「チューリヒ啓蒙主義の系譜とJ. G. ズルツァー（前篇）—マクデブルク時代の出会いと自己形成—」『長崎県立大学論集』第40巻第4号、2007年3月。
マックス・フォン・バーン（飯塚信雄ほか訳）『ドイツ十八世紀の文化と社会（第二版）』三修社、2001年。

戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人：フリードリヒ・ニコライ』朝文社、2001年。

佐々木純枝『モラル・フィロソフィの系譜学』勁草書房、1993年。

大津真作『啓蒙主義の辺境への旅』世界思想社、1986年。

成瀬 治『伝統と啓蒙—近世ドイツの思想と宗教』法政大学出版局、1988年。